
ファルスタッフ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファルスタッフ

【Nコード】

N3536I

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ウインザーにいる凶々しくて女好きで大酒飲みのとんでもない騎士ファルスタッフ。財布の確保と愛人と二人の人妻にラブレターを送ったのが彼女達にそれぞればれてしまつて。ヴェルデイ最後のオペラ『ファルスタッフ』を小説化しました。原作はシエークスピアです。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

第一幕その一

ファルスタッフ

第一幕 図々しいラブレ

ター

ウインザーにガーター亭という安い宿屋がある。ここは非常に有名な宿屋だ。何故有名かというところを宿ではなく家に行っているある老騎士のせいだ。この騎士の名をサー・ジョン・ファルスタッフという。一応は卿と尊称を付けて呼ばれる身分にある。だがとんでもない人物だ。

殆ど白くなってしまった薄い、ほぼ禿と言ってもいい頭にやけに大きな黒い目、顎鬚はまばらで口髭も多くはない。大柄だがそれ以上にやたらと太っていてまるでビール樽だ。この老の名前を聞くとロンドン市民達は口々にこう言う。

「あつ、あの人ですか」

「また何かやったんですか!？」

こんな有様だ。とかく話題の人物だ。いつもブラウンのズボンにごつい革靴に白いシャツとズボンと同じ色のチョッキを着ている。身だしなみはわりかし気を使っている。ただし他人には気を使わない。

今日も宿屋のロビーの大きな肘掛け椅子に座っている。向かい側には長椅子がある。それを挟んだテーブルの上にはワインの空瓶にインクスタンドにペンや紙、キャンドルが雑多に置かれている。彼はその前で二つの手紙に封をしていた。それが終わった時に一人の中年男が入って来た。

「ファルスタッフ卿!」

「誰じゃ」

男の方を振り向こうともしない。

「この前のことです!」

「借金取りならお断りじゃぞ」

平然として言葉だけ返す。

「とつとと帰れ」

「借金ではありません」

「女のことなら弁護士を連れて来い」

「女のことでもありません」

「じゃあ何じゃ」

「私はフランス人です」

「何っ、フランス人」

フランス人と聞くとその大きな目をさらに大きくさせて立ち上がった。そして誰かを呼んだ。

「親父、海軍大臣を連れて来い」

「どうされたのですか？」

蜂蜜色の髪にいささか白いものを混ぜた初老の男が出て来た。その棲み付いているファルスタッフのおかげで名前が知られてしまったガーター亭の親父ではなく彼の従者の一人バルドルフォだ。親父は奥で寝ているようだ。

「フランス人だ。スパイだ」

「この方はお医者様のカイウスさんですが」

「カイウス。何処かで聞いたな」

「そのせつはどうも」

にこりともせずファルスタッフに声をかけてきた。

「この前私の屋敷にお招きした時」

「何時だったかな」

とぼけてみせてきた。

「覚えておらんな」

「私の召使を殴って雌馬を使いものにならなくして」

「おい、親父」

そのカイウスが怒っているのを気にせずバルドルフォに声をかける。

「何でしょうか」
「シエリーと一瓶だ」
「シエリーですか」
「そうだ、それをくれ」
「わかりました」
「しかも家を滅茶苦茶に破壊してくれましたな」
「何だ、そんなことか」
カイウスの抗議を耳糞をほじりながら聞いていた。
「そんなこと!？」
「あんたのところの女中には何もせんかったぞ。それは感謝せよ」
「それはまた御親切なことで」
怒ってはいるが嫌味は隠さない。
「あんな目やにの出たお婆さんにはね。全く寛大なお話で」
「だから感謝せよと言っているのだ」
「それで貴方が騎士なら答えてほしいのですが」
「答えか」
「左様で」
「では答えよう」
カイウスの言葉を受けて本当に答える。
「わしはあんたの言う通りのことをやった」
「はい。それで?」
「やりたいからやった。それだけだ」
「王室評議会に訴えてやる!」
あまりにもふざけた答えなので遂に怒りを爆発させた。
「お好きなように。だが一つ忠告しておこう」
「何ですかな」
「あまり怒ると健康によくないぞ。それだけだ」
「どうも御親切に」
さらに怒りに油を注いで楽しんでるのは明らかだった。
「御忠告痛み入ります。しかも」

「今度は何じゃ」

「昨日私にお酒を御馳走して下さいましたね」

「上等のラム酒だ。満足しただろう」

安酒だ。それを振舞ったと自慢しているのだ。

「ええ。おかげで二日酔いで。最後の方はもう意識がなくて」

「まだ鼻が赤いな」

「その鼻が赤くなるまで飲ませてあんたは」

「わしが何をしたというのだ？」

「財布がなくなってるんですよ。ほら、その」

ロビーの端で酒を飲んでいる痩せた男を指差す。帽子に白い羽根をつけて黒尽くめで変に洒落た格好をしている。その男を指差したのだ。

第一幕その二

「貴方の従者のピストルさん」

「ピストラじゃ」

「そう、ピストラさん。彼と一緒にわしの財布を」

「ピストラ」

「何でしょうか」

酔った顔を主に向けてきた。

「この医者殿が言っていることはまことか？」

「間違いない！」

カイウスはまだ怒鳴る。

「ほら、ここにあるものがない」

「出るのは埃だけだな」

上着のポケットをひっくり返して見せると出て来るのは確かに埃だけだった。

「エドワード銀貨で二シリングと六グロード半分あったのにそれがない」

「これは侮辱だ」

ピストラはわざとむっとした顔で椅子から起き出て側に箒を掴んだ。

「旦那様、この愚か者をこの木の武器でやっつけたのですが」

「無礼な！私は紳士だぞ」

こう言われてさらに怒る。

「話し合いに来た紳士に何を言うか！」

「紳士が酔い潰れるものか」

「何を！」

今のピストラの言葉は完全に急所だった。怒りが頂点に達してさらに叫ぶ。

「この馬鹿！間抜け！ボロ口纏い！人でなし！犬！卑怯者！化け物！」

地中の精！毒茄子のつぼみ！」

「よし、紳士ならそんな罵倒はしないな！」

ピストラも本気になって向かうことにした。

「覚悟しろ、この藪医者！」

「おのれ、よくも言っではならんことを！」

「まあ待て」

ここで話の元凶が仲裁に入った。

「それでこの医師殿の財布を空にしたのは誰だ」

「どっちかだ」

少しだけ冷静になったカイウスはこう言う。

「親父か貴方の従者か」

「酔い潰れて夢を見ておられたのでしょうか」

バルドルフォはしれっとして言った。

「お酒はあらゆる悪事、過失、迂闊の父であり母でありますからな」

「まあそうだろうな」

ファルスタッフは強引にそういうことにした。

「酒を飲み過ぎるのがいけない。だからそうなる」

「飲ましたのは貴方ではないですか」

「飲んだのはあんだだ」

「うっ……」

こう言われるともう反論できなかった。その通りだった。

「あなたの言い分が正しいとしても真実はかくの如し。そういうこ

とじゃ」

「訴えてやる！」

「では証拠を。ありますから」

「うっ……」

「ではお引取りを」

「これから飲む時は正直で静かで上品で信心深い方と飲もう」

嫌味だったがそれはファルスタッフの脂肪どころか面の皮にも届かず跳ね返されてしまい逆にこう言われた。

「そんな奴は酒場にはおらん」

「ふん！」

怒りに任せて踵を返し退場する。扉を荒々しく閉め音が響いたのが最後だった。ファルスタッフは彼が去るとそのままイスに戻りバルドルフォが持って来たシェリーを手に取った。それを瓶ごとラッパ飲みしながらまた言うのだった。

「かつぱらいは優雅に、首尾よく」

「優雅に首尾よくですか」

「調子つ外れた馬鹿騒ぎではないのだ」

「こつピストラ達に説教するのだった。」

「それはよいな」

「左様ですか」

「騒がれるうちはまだ安芸人」

「こつも言ってみせる。」

「そういうことじゃ」

「わかりました、旦那様」

「それですね」

「何じゃ？」

「お勘定です」

宿で飲んでいる分だ。

「今日の分ですが」

「ふむ、どれだけじゃ」

「これです」

バルドルフォが勘定を店の奥から持って来た。何か親父が寝ているのが見える。

第一幕その三

「まずは雛鳥六羽が六シリリングです」

「ふむ」

「シェリー三十本で二リーレ」

続いてそれだった。

「七面鳥に雉にあと羊に」

「それぞれ幾らじゃ」

「先の二つが一マルクで」

「合計二マルクじゃな」

「それと羊が一ペニーです」

「よく見る」

バルドルフォにもう一度勘定を見るように言う。

「もう一度よく見てみよ。間違いではないのか」

「間違いありません」

こうファルスタッフに答える。

「やはりそれだけです」

「財布は見たか」

「真っ先に見ました」

「それでどうだった」

「こちらはありません」

「勘定があつて金がないのか」

「そうです」

実に素っ気無い返答だった。

「その通りです」

「御前等、食べ過ぎだろっ」

「そうですか？」

「わしは週に十ギニーも使っているぞ。御前等が毎日三十年もわしの脛をかじって酒場をはしこしておるからな。わしは痩せ細っている

「なのだぞ」

大嘘なのが一発でわかる言葉だった。その巨大な腹を見れば。

「全く。少しは遠慮しろ。茸みたいな赤鼻になりおつて」

「いえいえ、旦那様だからこそ」

「我々も」

しかし彼等は悪びれることなく主にお世辞を言ってきた。

「その偉大なお腹に誓いましょう」

「ご一緒させて頂いているのです、旦那様だからこそ」

「これはわしの誇りだ」

腹のことを言われると満足してそれをさすってみせる。

「それをさらに大きくさせる為に今は」

「どうされるのですか？」

「知恵を使う」

右の人差し指を立ててみせて笑みを浮かべての言葉だった。

「フォードという成金がいるな」

「ええ」

「しかも身分も低くなくてしかも奥方は別嬪だ」

「えらく恵まれた奴ですな」

「実に羨ましい」

「金庫の鍵を持っているのもその奥方よ」

「ファルスタツフはこれも言う。」

「あの愛の様な瞳も白鳥の様なうなじも花の様な唇も。実によい」

「まことに綺麗な方で」

「ですがその奥方が何か」

「アリーチェといったか」

「今度はその奥方の名を口にする。」

「わしに気があるのだ」

「まさか」

「気のせいでは？」

「そんな筈がない」

今の二人の言葉は目を怒らせてムキになって反論する。

「あの屋敷の前を通ると見てくれるのだ。それはどうして」

「天気を見ていただけでは？」

「ここは晴れが少ないですし」

ロンドンだからだ。この街は昔から雨が多い。

「わしはすぐわかった。この腹と男らしい脛に惚れたのだ」

「下半身ばかりか」

「また変わっているな」

「しかももう一人いる」

「おや、それはまた」

「果報なことだ」

また誇らしげな話が始まる。

「マルゲリータ夫人、通称は……ええと」

「メグさんですね」

「そういえばあの方もまた」

「そうだ。家の金庫の鍵を持っていて別嬪でな。さながらゴルゴン

デ、黄金海岸だ」

インドの古都とアフリカの海岸だ。どちらも欧州に途方もない富をもたらした。もたらす方にとってはたまったものではなかったが。

第一幕その四

「わしは九月半ばの快い夏の様に魅力に溢れておる。まさにお似合
いだ」

「そうですね」

「どうだか」

「お似合いなのだ」

また目を怒らせてそういうことにする。

「それでだ」

「はい」

「何でしょうか」

「御前達にやってもらいたいことがある」

あえて勿体ぶって二人に告げる。

「よいか。この手紙をだ」

「そういえば昨日必死に書いておられるかと思えば」

「それでしたか」

「左様。ピストラは」

「はい」

ピストラは名前を呼ばれて応えた。ファルスタッフはその彼に一通の手紙を差し出した。

「御前はこれをアリーチェ夫人に。バルドルフォ」

「何でしょうか」

「御前はこれをメグ夫人にだ。それぞれ頼むぞ」

「いや、それは旦那様」

「ちよつと」

しかし二人はここで難しい顔をファルスタッフに対して見せるのだった。当のファルスタッフもすぐにそれに気付いた。

「嫌なのか？」

「我々として騎士の端くれです」

「そうです」

二人はこのことを強調してきた。

「戦場では馬に乗る身分。それでどうして」

「この様なことに手を貸しましょうか」

「何故だ？」

「それは言うまでもありません」

「禁じられているからです」

二人はそれは禁じられていると言っただ。

「ですからそれは」

「お受けできません」

「何に禁じられているのだ」

「名誉です」

ここでは二人の言葉は完全に重なった。

「ですから申し訳ありませんが」

「この申し出は」

「ええい、役立たずめが」

ファルスタッフはそれを聞いて早速怒り出した。

「何が名誉か、不名誉の塊が」

「旦那様」

「幾ら何でも今のお言葉は」

「いいか、聞くのだ」

怒ったまま二人に怒鳴る。

「わしにしる必要となれば神様に目をつぶってもらい」

「それはいつもでは？」

「先程のお財布のことといい」

「だから聞け！」

本当に怒っている。

「名誉を棚にあげていんちきとかさまに精を出しずるく振舞っているし方針も変える」

「それもまた」

「いつもでは」

「だから聞けと言っているのだ！」

「ここでもその強引さを発揮する。」

「御前達ときたら山猫みたいな目つきと不愉快な薄笑いを浮かべて名誉にしがみついている。そんな連中に何が名誉か。大体名誉で腹が一杯になるか」

「これこそファルスタッフの本音だった。名誉なんぞ糞くらえ、そういう考えなのだ。」

「名誉が傷ついた足を治すか。何も治せない、名誉は医者ではないのだ」

「それはそうですが」

「ですが」

「名誉はただの言葉だ。ただ空を飛ぶだけのもの」

「彼にとってはその程度のものでしかないということだった。かなり正直だ。」

「死人にも必要のないもの。生きている奴にも価値はない。甘い言葉がそれを膨張させて思い上がりが墮落させて陰口が醜くさせる。」

「そんなものはわしには必要がない。それでも名誉というならば！」

「うわっ、来た！」

「旦那様の雷だ！」

「わしが貴様等にその価値を教えてやる！覚悟しろ！」

「ここで箒を手にとって振り回す。二人はそれから逃れるのがやっとだった。」

「に、逃げる！」

「旦那様御乱心！」

「死んでしまえ！それか首をくくってしまえ！」

「どちらも同じ意味だ。」

第一幕その五

「馬鹿共が。覚悟せい！」

「う、うわあああつ！」

「な、何て有様だ！」

二人はそれぞれ扉から飛び出て逃げる。何とかファルスタッフの筈から逃れる。大暴れして汗をかいたファルスタッフはとりあえず椅子に腰を下ろして落ち着く。そこに来た小僧にその二通の手紙と僅かのチップを与えて二人の奥方のところに行かせる。そのうえでやっと落ち着きシェリーを飲みつつこれからのことにニヤリと笑うのだった。

フォードの家。外は煉瓦、中は木造で大きな立派な家だ。その庭の緑の芝の上に二人の貴婦人がいた。一人は赤い服で白いカラーが目立つ。ブロンドに黒い目を持っていてその視線が強く細い顔立ちの小柄な美女である。もう一人は青いドレスに白いカラー、灰色の目に銀髪だ。背が高くややふつくらとした優しげな顔立ちだ。二人は実に対象的だが一っだけ同じものを持っていた。それは美貌だった。

その二人の美貌の貴婦人が言い合う。まずは赤いドレスの貴婦人から。

「ねえメグさん」

「何かしらアリーチェさん」

二人はそれぞれ言い合う。

「今日のあの娘はどうかしら」

「ナンネッタね」

「そう、あの娘」

母に似て小柄であるが黒っぽい髪だ。大人しい白い服を着ているがそれがよく似合う。如何にも少女といった薔薇色の頬に黒い目が実に映える。利発そうな娘だ。

「どうかしら」

「奇麗ね」

メグはにこりと笑ってアリーチェにこう述べる。

「若い子が放っておかないわよ」

「そうね。確かにね」

「ええ、そうね」

「こんにちは」

ここでもう一人来た。彼女は黄色いドレスだ。カラーは同じ色だ。茶色の髪と目をした中肉中背の女だ。年齢はアリーチェ達と同じ位だ。知的で山猫に似た目をしていて唇の端で静かに微笑んでいても。

「ご機嫌麗しゆう」

「あら、クイツクリーさん」

「貴女も来てくれたのね」

「折角のお茶ですから」

微笑んでこう二人に述べるのだった。

「それです」

「貴女も来てくれたのなら調度いいわ」

アリーチェはクイツクリー夫人に対して述べた。

「実はね」

「はい」

「こういうものを貰ったのよ」

「あら、私と同じ」

それを見てメグが思わず言った。

「ラブレターを貰ったのね」

「ええ、そうなのよ」

メグに答えて困った顔を見せる。

「貴女もだったの」

「そうなのよ。奇遇ね」

「そうね」

「世の中おかしなものがあるものね」

ナンネッタはそれを見て言った。

「見たら何か紙も封印も一緒ね」

「そういえば」

「確かに」

彼女の言葉を聞いて二人の貴婦人は手紙をまじまじと見た。見れば確かにそうだった。

「では中身は」

「まさかとは思うけれど」

同時に開いてその中身を見る。するとその中身も同じだった。

「何とまあ。名前を変えただけ」

「私のねメグになっていて」

「私のはアリーチエになっている。それだけね」

「同じ文句で同じ筆跡で同じインクで」

「ただ名前を変えただけ」

「そして最後にあるのは」

差出人の名前だ。そこにあるのは。

「サー・ジョン・ファルスタッフ」

「両方共そのまま」

「何て破廉恥な」

「おやおや、これはまた」

クイツクリーもこれには呆れていた。

「あのお騒がせ騎士殿ですか」

「何て破廉恥な」

「これは許せないわ」

早速二人は激昂を見せる。ナンネッタはその二人に対して問う。

「それでどうするの？」

「決まってるわ」

「思い知らせてやるのよ」

やはりそれであった。破廉恥な男に天罰を、というわけだ。

第一幕その六

「そして笑いものにして」

「それはいいわね」

ナンネッタが母の言葉に相槌を打つ。

「あの酒樽親父だけれど」

「ええ」

四人の女達が話しに入る。

「今でも男前の若い人とおなじような足取りらしいわ」

「まるで大砲みたいな身体なのに」

クイツクリーも容赦がない。

「何とまあ」

「嵐の時に大波が打ち上げた鯨そっくりなのに」

メグも言う。

「私も仲間に入れて」

「貴女もなのねナンネッタ」

「ええお母様。そのかわり」

「わかつてるわ。それにしても」

またファスタッフのことを言うのだった。

「こんな破廉恥な手紙を送ってくるなんて」

「大砲みたいに破裂させてやりましょう。女の微笑みとウィンクと足取りで」

「その通りですわ」

メグとクイツクリーもまた話す。

「あの鯨を懲らしめて街中で笑ってやりましょう。陽気な女房達の笑いで」

「これに上手くいけば私は彼と」

ナンネッタはあることを考えていた。

「幸福になれるわね。二人で」

「とにかく結構よ」

「女房達の陽気な復讐は今はじめますわ」

そんなことを言い合っている。見れば庭の離れたところでは男達も話をしている。あのカイウスとピストラ、バルドルフォが二人の初老と青年の男にそれぞれ話をしている。初老の男は茶色がかった金髪に黒い目の額の広いブラウンの服とダークブラウンのズボンの男で青年は立派な眉目に黒い目、鮮やかなまでに光り輝く金髪に高い鼻を持つ美しい男だ。服も青い上着と黒いズボンに赤いマントと立派である。三人は彼等に言っていたのだ。

「あの男は無頼漢でいかさまが得意で盗人で悪党で分ならず屋で壊し屋なのです」

カイウスが忌々しげな顔でまくしたてている。

「先日も私の家を滅茶苦茶にしてくれました。この二人ですが」

「そのファルスタツフ卿の従者達ではないか」

「左様です、フォードさん」

初老の男に対して答える。

「だからこそ信用できます」

「ふむ」

「まずはですね」

バルドルフォが話す。

「旦那様は不埒なことを考えています。慎重過ぎると貴方は助かりません」

「やけに物騒だな」

「それを防ぐ為に、貴方を泥沼に入れない為に私は来ました」

「私もです」

ピストラも名乗り出る。

「まず我々は馬に乗る身分です」

「うむ」

「その誇りにかけて言いましたよ」

つまり真実というわけだ。誇りにかけて。

「旦那様は貴方に対して仕掛けるつもりです。詐欺師、いえならず者に狙われています」

「フォードさん、どうされますか」

青年がフォードに対して問う。

「どうというとフェントンさん」

「あの男を懲らしめてやりましょう」

フェントンの提案はこうだった。

「あのふてぶてしい太っちょを。凝らしめて地獄に送ってやりましょう」

「地獄にそうです」

「さあフォードさん」

「今こそ」

「旦那様に天罰を」

「少し待ってくれ」

そのフォードは困惑した顔で四人に言うのだった。

「何か？」

「頭が混乱する。雀蜂が飛び回ってしかも熊蜂まで喚いていてしかも大風をはらんだ雨雲が暴れているようだ。全く何が何だかわからない」

それだけ混乱しているのだ。

「そもそもだ。ファルスタッフ卿は何を企んでいるのだ？」

「貴方の家に押し入り」

「ふむ」

まずはピストラの話聞く。

「貴方の奥さんとねんごろになって金庫のお金を拝借しようとしているのです」

「何と」

「それはとんでもない」

それを聞いたカイウスとフェントンが思わず声をあげる。

第一幕その七

「もう手紙を書いて送ってもいます」

「もうか。何という男だ」

「私はそれを申し付けられたのですが断りました」

「私もです」

バルドルフォも言う。

「我々のするような仕事ではありませんので」

「全く以って」

「噂は聞いていたが何という破廉恥な男だ」

フォードも怒らずにはいられなかった。

「どのようにしてくれようか」

「旦那様は無類に女癖が悪く」

「それは聞いていたが」

その方面でも評判だったのだ。

「女とあれば色目を使い別嬪でもそうでなくても生娘でも亭主持ちでも女であれば誰でも」

「とんでもない奴だな、あの歳で」

「しかもです」

バルドルフォが続く。

「欲深く無反省で」

「救いようがないな」

「ですから本当に御気をつけ下さい」

「とんでもないことになりますから」

「わかった。ではまずはだ」

フォードはそこまで聞いて決心した。目が怒っている。

「女房を見張ろう。ファルスタッフ卿もな」

「是非共」

「そしてだ」

さらに言っ。

「何があっても私の財産を守るぞ」

「あっ」

フェントンはフォードの話を聞きながらふと庭の遠くに目をやる。するとそこにはナンネッタがいた。

「あの人がいる」

「あの方だわ」

ナンネッタの方も彼に気付いて声をあげた。

「家内だ」

「主人ね」

フォードとアリーチェもお互いに気付いたがこちらは静かなものだった。

「聞かれたか？」

「聞かれたかも」

それぞれそれを危惧する。

「ねえ奥様」

「何かしら」

メグがこっそりとアリーチェに囁いてきた。

「御主人のやきもちはどんな感じかしら」

「それが趣味よ」

ということだった。

「困ったことに」

「では場所を変えましょう。聞かれたらまずいわ」

「そうね」

彼女達はその場を後にする。フォード達もだった。カイウスがフォードに対して囁いたのだ。

「聞かれたら」

「そうですね。それでは」

彼等の場所を変える。庭には誰もいなくなつた。しかし右手からフェントンが、左手からナンネッタが姿を現わした。二人は互いに

見詰め合って抱き合う。それから話をする。

「ねえナンネッタ」

「何？」

「キスをして」

うつとりとした目でナンネッタを抱きながら頼む。

「いいかな、いつもみたいに」

「ええ、わかったわ」

「有り難う」

それを受けてフェントンの左の頬にキスをする。それから彼女は言うのだった。

「誰にも見られていないわね」

「大丈夫だよ。けれど」

「けれど。何？」

「皆にも見せてあげたいよ」

熱い心で語るのだった。

「僕達の愛をね。この甘い口付けも愛らしい唇も」

「まあ、恥ずかしい人」

「だって君が好きだから」

熱い目で語る。

「だからだよ」

「そうなの。あっ」

ここでナンネッタは気配を察した。

「誰か来るわ」

「えっ、誰だろう」

「とりあえずは隠れましょう」

こうフェントンに言う。

第一幕その八

「見つかったら何かとややこしいことになるわ」

「そうだね、それじゃあ」

「ええ」

姿を庭の茂みの中に隠す。出て来たのはアリーチェ達だった。

「それで奥様」

「どうするかですわ」

「そうね」

アリーチェはメグとクイックリーの言葉に頷く。

「どうしましょうか」

「報いを与えてやるべきです」

「これは絶対です」

二人は断言する。

「問題はそれをどうするかですが」

「手紙を書いてみようかしら」

アリーチェはふと呟いた。

「それだとどうかしら」

「手紙を？」

「それなら」

「あら、ナンネッタ」

何気なく話に入る。

「いたの」

「いたわよ、お母様」

にこりと笑ってそれは誤魔化す。

「それでね。その手紙を」

「ええ」

「誰かに持って行かせるのよ」

「あっ、それはいいわね」

「そうね」

女達も彼女の言葉に頷く。

「けれど私達が行くと」

「あれだし」

言い寄られているアリーチェとメグはそれはできない。だから困った顔を見せる。

「ナンネッタだとかえって言い寄られるわね」

「どうすれば」

「では私が」

ここでクイツクリーが名乗り出た。

「貴女が？」

「当事者じゃないからいけますわ」

にこりと笑って言うのだった。

「ですから是非共」

「では御願いできるかしら」

「はい」

アリーチェに対してその笑顔で頷く。これで決まりだった。

「ではまずはおびき出してからかって」

「それから？」

「酷い目に逢わせてやるわ」

娘に答える。

「絶対にね」

「容赦なく」

「勿論ですわ」

メグにも答える。

「あんな不誠実な男には目にも見せてやらないと」

「いけませんわね」

「そういうことですわ。あの恥知らずな雄牛」

アリーチェはファルスタッフをこう呼んだ。

「好色な脂肪の塊」

「大酒飲みの食いしん坊」

これはメグの言葉だ。

「しかも反省もしないで次から次に悪事を働く」

「ここで懲らしめてやらないと」

「河に投げ込んであげましょう」

クイツクリーとナンネッタも笑いながら話す。

「それか火炙りか」

「雄牛の丸焼きね」

「猪かも」

とかく色々言われるファルスタッフだった。自業自得だが

「じゃあクイツクリーさん」

「わかっていますわ」

クイツクリーは笑顔でメグに応える。

「お任せあれ」

「そういうことで」

また女房達は姿を消しナンネッタだけになった。するとフェントンはそつと茂みから姿を現わす。そうしてナンネッタにまた近付くのだった。

「忙しい日だね」

「お祭りの前が一番忙しいのよ」

ナンネッタはにこりと笑ってそのフェントンに語る。

「だから驚くことはないわ」

「そうなの」

「そうよ。それでね」

「何かな」

「私達のことだけれど」

フェントンを見上げて言う。

第一幕その九

「恋のルールは一番弱い人が一番強い人に勝つ」

「うん」

「そうだけれど。どうなのかしら」

「僕はいつも弓矢を持っているけれど」

「弓矢を？」

「弓は唇で」

彼は言う。

「矢はキスさ」

「それなのね」

「そうだよ。だからまた」

「さつきしたからいいじゃない」

くすりと笑ってフェントンをかわす。

「キスはまた今度ね」

「またなの」

「そういうこと。また後で」

「そんな。折角二人になつたのに」

フェントンはナンネッタの態度がつかれないと思つて悲しい顔になる。しかしこれはナンネッタの駆け引きだったのだ。

「恋は時として離れるのも楽しいものよ。だから」

「だから今はつてことかい？」

「そういうこと。また誰か来たわ」

「今度は君のお父さんだよ」

「見つかったわまずいわね。それじゃあまた」

「今度ね」

「ええ、また今度」

こつ言葉を交えさせて別れる。ナンネッタが左手に消えると右手からフォードがカイウス達と共に姿を現わす。フェントンもこつそ

りと彼等の中に入る。そのうえで話にも加わる。

「それでだ」

「ええ」

フォードがバルドルフォに問うていた。

「ファルスタツフ卿はどちらに。確か」

「ガーター亭ですよ」

「そうだったね。あそこも随分と評判が悪くなったものだ」

「それも全てはファルスタツフ卿のおかげか」

「あの方あつてのガーター亭です」

ピストラも言う。

「おかげ様で」

「それでだ」

「はい」

「私をあの人に紹介して下さい」

ここで二人に頼み込む。

「宜しいでしょうか」

「貴方をですか」

「ただし変名で」

「こう言い加える。」

「それで御願います」

「わかりました、それではそういうことで」

「誓いましょう」

フォードと二人が誓い合うとそこにカイウスとフェントンも加わる。何時の間にか左手に女房達も来ている。彼女達もあれこれと言い合っている。

「捕まえて糸車よりも回してやって」

「ウインクでぐにゃぐにゃになったとことをとっちめてやって」

「冷や汗で川を作らせて」

「街の笑いものにしてやりましょう」

アリーチェもメグもナンネットタもクイックリーも誓い合う。男達

も誓い合いながら銘々に言い合う。

「真実は薬の味がします。しかし良薬は口に苦し」

「旦那様はお酒がお好きなのでそれで釣って。詐欺師はこれでお陀仏だ」

「今の苦勞は仕込み。後で笑おう」

「夫婦の危機を作ろうとするあの旦那様を懲らしめて。そうすればフォードさん、貴方は助かります」

「向こうでは御婦人方が話し合いか。本当に色々あるけれど僕はナシネットを」

カイウスもピストラもフォードもバルドルフォもフェントンも口々に言い合っている。九人が九人で。それぞれあれやこれやと言いつつ合った。

また男達が消えて女達だけになって。アリーチェが音頭を取る。

「ぐずぐずしてはいただけませんわ」

「そうですね」

「それでは」

メグとクイックリーがそれに頷く。

「ではクイックリーさん」

「何時それをしますか？」

「明日御願いできます」

アリーチェはにこりと笑いながらクイックリーに言う。

「明日。それで」

「わかりました。では明日」

「そういうことで。では皆さん」

「はい」

三人が楽しげな笑顔でアリーチェを囲む。アリーチェはその三人にまた告げる。

「明日。御願いしますね」

「畏まりました。それでは」

「そのように」

いっしょに合ってよじやく分かれる。楽しい舞台の準備は整ったの
だった。

第二幕その一

第二幕 洗濯籠の罨

ガーター亭のロビー。あの肘掛け椅子に座るファルスタッフにピストラとバルドルフォが頭を垂れている。二人は何度も何度も懸命に謝罪している。ように見える。

「いえ、本当にすみません」

「反省しています」

「ふん」

ファルスタッフはシェリーを木のカップに入れそれをごくごくとやっている。その赤ら顔で二人の話を聞いている。そのうえで彼等に言うのだった。

「猫が魚に誘われるみたいだな」

「といたしますと」

「どういうことでしょうか」

「悪党が古巣に戻った」

何か妙に思慮深い顔で述べるのだった。

「違うか？」

「いえいえ、滅相もない」

「やっぱり私達には旦那様だけです」

「主はか」

「左様です」

「ですから」

蠅みたいに両手をこすり合わせて言う。

「もう一度、御願いします」

「どうか私達を」

「来る者は拒まず」

ファルスタッフは鷹揚に一言出した。

「わしの人生哲学じゃ」

「有り難うございます、流石旦那様」

「感謝します。それですね」

「何じゃ？」

「御会いたい方がいるのですが」

バルドルフォがこう切り出してきた。

「わしにか」

「はい、御婦人の方です」

「ふむ」

それを聞いて少し考える顔になった。考える顔は哲学者に見えないこともない。哲学者というよりは胡散臭い破戒僧の方が似合う顔であるが。

「どうされますか？」

「通せ」

こう告げた。

「わかりました。それでは」

「どうぞ」

二人が宿の扉を開ける。するとそこからクイックリー夫人が出て来た。実は彼等はグルというわけだ。

「こんにちは、ファルスタッフ卿」

「ええ、こんにちは」

クイックリーは頭を下げる。ファルスタッフも椅子に座ったままそれに応える。

「お元気そうですね」

「少なくとも酒は美味いですな」

そのシエリーを飲みつつ述べる。

「それで卿は何か？」

「内密のお話でして」

「内密の」

「宜しいでしょうか」

「わかりました。それでは」

彼はその言葉を受けてまずは後ろに控えている二人にコインを数枚投げ与えた。そのうえで言うのだ。

「貰った金だ。好きに使え」

「どちら様からの浄財で？」

「その神父とカードをして勝った」

勿論いかさまである。何も知らない純粋な神父を口車に乗せてそうして金を巻き上げたのである。

「それでだ。飲むなり何なりしろ」

「わかりました」

「では暫し」

二人は消えた。ファルスタッフはそれを見届けてからあらためてクイツクリーに顔を向ける、そのうえで彼女に対して問うのだった。

「それで如何様ですか。内密とは」

「奥様のことで」

「奥様？」

「アリーチェ・フォードさんのことで」

「何と、あの奥方の」

丁度狙っている相手だ。その名前が出て思わず声をあげてしまった。

「あの方もお気の毒に」

「また何かあったのですか？」

「貴方のせいですよ」

悲しい顔を作ってファルスタッフに告げる。

「貴方がとんでもない色男だから」

「わしがですか」

「あの方はすっかり貴方に夢中です。お手紙を差し上げましたね」

「うむ」

クイツクリーの言葉に答えて頷く。

「それから夢中で。それに仰っていました」

「何と仰っていたのですかな」

椅子から腰を浮かして問う。

第二幕その二

「御主人が家を空けられる二時から三時の間に御会いしたいのとこのです」

「二時から三時ですか」

「そうです」

「こう教える。」

「その時間ですと貴方は奥様とお話ができますよ」

「ううむ、それはよきこと」

「ただし」

「ただし？」

「御主人には御気をつけ下さい」

忠告はする。ただしこれはかなり縁起だ。これによりファルスタッフに罠を警戒させないようになっているのだ。人妻なら夫がいる、そのことを言えばかなり違うものだ。それを言ってファルスタッフを現実の世界に入れてそこで動かすつもりでもある。かなり考えての言葉なのだ。

「御主人にですか」

「嫉妬深い方なので」

「うむ。それは承知」

クイックリーの言葉に頷いてみせる。実際に夫のことは頭に入れた。クイックリーの計算通りに彼は動いている。しかし本人は気付いてはいない。

「そしてもう一つ」

「もう一つ？」

「メグのことです」

「彼女がどうかされましたか？」

「あの方もなのです」

「ほっ」

彼女にも声をかけていたのでまた身を乗り出すことになった。

「あの方もですか」

「ただあの方の御主人はいつも家におられますので」

「難しいのですな」

「可哀想な方です」

「それはまた。ところで」

「はい」

今度はファルスタッフが問うた。

「何でしょうか」

「御二人はお互いのことにはきづいていますかな」

「いえ」

「それは何より」

これこそファルスタッフの望む最高の状況だった。話を聞いてにんまりと笑う。

「宜しきことですな。それでは」

小銭を取り出してそれをクイックリーへ手渡す。つまりチップだ。

「少ないですがどうぞ」

「あつ、これはどうも。それではこれで」

「うむ、お疲れ様」

クイックリーは一礼してから退室した。ファルスタッフは一人になるとまずは小躍りした。その子供みtainな動作の中で自分自身に對して言う。

「行け、老いたるジョン。老いた御前の身体にもいささかの甘さは残っている。引っ掛かった女はわしの為に皆地獄行きだ。それも全てわしの魅力の為に。アリーチェと財布はこれでわしのもの、いずれはメグもまた」

「あの、旦那様」

「もう宜しいですか？」

「むっ」

小躍りしているところに扉の方からピストラとバルドルフォの声

がした。

「何じゃ、もう戻って来たのか」

「旦那様と御会いしたい方がおられまして」

「男の方です」

「何じゃ、男か」

まずはそれを聞いて詰まらなさそうな顔になる。実に素直じゃ。

「男になぞ用は」

「お土産を持って来ておられますぞ」

「お土産とな」

「はい」

「キプロス産のワインです」

「ほう、ワインか」

二人は流石に主の好みがわかっていた。だからこそこのことでのワインだった。

「お通ししろ」

「わかりました」

「ではフォンターナさん、どうぞ」

こうして二人にそのフォンターナが案内された。まずはお互いに一礼してからファルスタッフは上機嫌にジョークを飛ばしてみせた。

「酒の湧き出る泉ですな」

フォンターナは泉という意味だ。それを踏まえてのジョークだ。

「何よりですな」

「はじめまして、ファルスタッフ卿」

見ればフォードだ。偽名で来ているのだ。

第二幕その三

「御機嫌麗しいようで」

「いえいえ。ああ、御前達は」

「わかつております」

「それでは我々はこれで」

「心置きなく飲むがいい」

鷹揚に彼等を送り出す。また二人になって話をする。フォードが話を切り出してきた。

「まずはですね」

「何でしょうか」

「私は財産は恵まれています」

「まずは幸福の基本におられるわけですな」

「幸福の基本ですか」

「左様。人にとっての幸福とは」

ファルスタッフはここでわざと勿体ぶって格言めいて言う。早い話が格好をつけている。

「財産があり健康で美女に囲まれていること」

「その三つですか」

「この三つがなければ不幸以外の何者でもありません。不幸にして私が持っているものは健康のみです」

「一つだけですか」

「残念なことです。ですが御相談には乗りますぞ」

そのまま勿体ぶってフォードに言う。

「して。何の御用件でしょうか」

「実は恋焦がれているのです」

フォードはわざと悩ましげに言ってみせる。これは演技だ。

「どなたですか？」

「フォードという男の妻でして」

「ふむ」

ファルスタッフはここでは表情をわざと消して聞いている。

「その方ですか」

「見詰めても見返して下さらずプレゼントにも反応はなし、私は振られてばかりです」

「愛は休むことがなきもの」

ファルスタッフはここでこう言った。

「この命果てるまで影の様に逃げても逃げてもついて来て追いかければ逃げるもの」

「実に厄介です。ですから貴方のお力をお借りしたいのです」

「わしのですか」

「そうです」

懇願する顔を作って言う。

「まずはこれはほんの気持ちです」

「いや、どうも」

彼が差し出した金貨がふんだんに入った袋を受け取る。外見はやはり表情だが内面はほくほくしてにやけている。しかしそれは顔には出さないのだった。

「あの方は御主人に操を尽くすことだけを考えておられて。それでですね」

「それで」

「貴方に私の代わりになって欲しいのです」

「またそれは随分変わった申し出ですな」

「貴方だからこそです」

こっそりとファルスタッフの自尊心をくすぐる言葉を入れて彼をその気にさせる。

「私が駄目ならもう誰かに陥落させて欲しいのです、城を」

「城をですか」

「その將軍は貴方しかいません」

何処か寓話めいてもいた。自分が駄目なら他人にして欲しいとい

う。ファルスタッフはこう思ったが生憎フォードは本心ではそう思
つてはいなかった。ここにその差があった。だがフォードはそれを
隠して話すのだ。

「ですからどうか」

「わかりました。それでは」

「有り難い。それでは」

ここで財布を一つ渡す。これもファルスタッフを乗せる為の出費
である。

「宜しく御願いますね」

「いや、どうもどうも」

やはり内面でにやけながら財布を受け取り応える。

「実はもう手筈は整ってしまして」

「整っている」と

「左様です。まああと半時間であの方はわしのものですじゃ」

「半時間！？どうしてですか」

「あの方はわしを慕ってしまして。それで今から行くのです」

「今ですか」

「二時から三時までの間に」

彼は言った。

「旦那がおられぬので。その間に来るように言われているのです」

「誰にですか？」

「そのアリーチェ夫人にです」

フォードはそれを聞いて内心激怒した。それを隠すだけでも四苦
八苦だった。

「そうだったのですか」

「あそこの旦那はメネラーオスかはたまたコキユか」

ギリシア神話のセレネーの夫のスパルタ王だ。セレネーをパリ
スに奪われた。

「そのうちコキユの印の角の上で花火をつけてやりましょう。間
抜けな雄牛の角に」

(何ということが)

フォードは今のファルスタッフの有頂天の言葉に内心怒りで震えた。

第二幕その四

「本当に角が伸びるようだ。妻は私の名誉も家もベッドも汚そうとしている。私は騙されからかわれ恥をかけようとしている。私は世間の笑いものだ」

「お楽しみに」

（結婚は地獄だ、女は悪魔だ。だが）

隠れてファルスタッフを見据える。向こうは有頂天なので気付かない。

（見ている。必ず一泡吹かせてやるからな）

「では行きますか」

何時の間にか身なりを整えていたファルスタッフがフォードに声をかける。新しい胴着を着て帽子とステッキも持っている。意外と似合っている。

「あの方のところに」

「では途中まで」

「はい、一緒に」

「二人仲良く途中まで」

「ええ」

こう言葉を交えさせながら表面上は仲良くファルスタッフについて行く。しかしその内面は怒りと嫉妬と復讐の念で燃え上がりどうにもならなくなっていたのだった。

フォードの屋敷。木造の大きな屋敷だ。後ろに庭が見える大きな窓が中央にあり左右に階段がある。大広間には暖炉と気作りの椅子が幾つもあり上に花瓶を置いた円卓が中央に置かれている。それがまるでアーサー王の円卓のように見える。アリーチェはその円卓の前で女房達と話していた。皆笑顔だが何故かナンネッタだけ元気がない。

「これで準備万端整いましたわね」

「ええ」

クイツクリーがアリーチェに笑顔で応える。

「いよいよですわね」

「パーティーは間も無くですわね」

メグも楽しそうに言う。

「首尾よくいきましたわよ」

「有り難う、奥様」

アリーチェはその笑みでクイツクリーに礼を述べる。

「畏にかかった鯨がどうなるか」

「見物ですわね」

「全くですわ。もうすぐで畏にかかったとも知らずやって来て」

そのクイツクリーに応えて言う。

「報いを受けるのですわ」

「それは何時なの？」

「二時から三時の間よ」

クイツクリーはナンネッタの質問に答えた。

「その間に来るように言っておいたわ」

「じゃあ本当にもうすぐじゃない」

時計を見る。もう二時に近い。

「洗濯籠も用意したし。これで」

「それはそうとナンネッタ」

アリーチェはここで娘の様子がおかしいのに気付いた。何故か彼女だけが笑顔ではないのだ。沈んだ顔をしていたのである。口数も少ない。

「どうしたの？元気がないけれど」

「お話してもいい？」

「ええ」

その沈んだ娘の言葉に応える。

「いいなさい。母親は娘の話を聞くものよ」

「じゃあ。いいのね？」

「勿論よ。だから」

娘に対して優しい声をかけて言うように促す。

「言って御覧なさい」

「実はお父様が」

「あの人が」

おずおずと告白しだした娘の言葉を聞く。メグとクイックリーもアリーチェを挟んで彼女の話聞く。

「私をカイウスさんと結婚させようとしているのよ」

「えっ、それはまた」

「随分と酷い」

「あまりと言えばあまり」

アリーチェだけでなく二人も思わず声をあげる。

「あんな人とよくもまあ」

「何を考えているんでしょ」

「お母様もそう思うわよね」

「勿論よ」

娘の言葉に対して全面的に頷いてみせる。

「当然でしょ、そんなことは」

「やっぱり。石にでも打たれた方がましよ」

「キャベツの芯を弾にした鉄砲で撃たれるようなものよ」

アリーチェの表現もかなりのものだ。母親は娘に対して断言してきた。

「安心しなさい、そんなことはさせないから」

「ええ、そうよ」

「ナンネッタちゃん、安心して」

メグとクイックリーも参戦する。

「私も協力するわ」

「そんなことはさせないからね」

「そう。じゃあ御願いするわ」

三人の心強い味方を得てナンネッタの顔が一気に晴れやかになっ

た。さながら長い雨の後の太陽だ。

第二幕その五

「これで私は救われるのね」

「そうよ。さて」

その間に二人の召使い達が洗濯物がたっぷりと詰まった籠を持って来た。アリーチェはそちらに顔をやる。

「それはそこに。それで私が呼んだらその籠をお堀にね」

「落とすのね」

「静かに」

娘の言葉に右目を瞑って微笑んでみせて述べる。

「いいわね」

「わかつたわ」

「そういうこと。下がって」

また召使い達に指示を出す。

「あとは舞台の準備は」

「大体できているわ。私のリユートはそこだし」

見ればテーブルの上にはさりげなくリユートも置かれている。

「衝立も広げて。よし」

「ここですわね」

「ここで」

「ええ、そこで」

メグとクイツクリーに対して答える。衝立は暖炉と洗濯籠の間に拡げて置かれた。ここまでやったうえでアリーチェは満足した顔で微笑むのだった。

「さてさて、いよいよ開幕よ」

「お芝居がはじまるのね」

「そうよ、最高のお芝居よ」

娘に対してにこやかに笑い軽やかに回って話す。もう喜劇役者になっっている。

「陽気な女房達の仕返し。辺りに響き渡るような大笑いの時間、笑い声が巻き起こり戯れ合つて矢と鞭で身を固めて煌き広がっていくのよ。喜びと笑いが辺りで、心の中で火事の時の火の粉みたいに煌くの、私達の為に」

「けれどちよつと危ない仕事でありますわ」

メグが笑つてそのアリーチェに述べる。

「あのとんでもない太っちょとの」

「私が見張りますので」

「御願いな、クリツクリーさん」

クイツクリーに笑顔で声をかける。

「具合が悪くなつたら合図をするから」

「私は出入り口を見張るわ」

「貴女はそつちを御願いな」

「ええ」

娘に対しても言う。そのうえでまた言ってみせる。

「あの男に見せてやるわ。身持ちの正しい貞淑な女の悪戯の怖さ、女の中で最も罪深い女とは」

「その女とは？」

「猫を被つた女よ」

娘に笑つて教える。

「陽気な女房達が見せてあげるわ」

「来ましたわ」

クイツクリーが窓の方を見て一同に告げる。

「来たのね」

「ええ。ではクイツクリーさんは二階に」

「はい」

「メグさんはあつちの扉に」

「わかりましたわ」

「ナンネットタは出口にね」

「わかつたわ」

それぞれ見張りに行かせる。人の配置も整った。そのうえで自分
はさりげなくテーブルの側に腰を下ろしてリュートを弾くのだった。
優雅に、それでいて朗らかに。その朗らかな場面に主役が来た。

「遂に私はそなたを得たり、輝く花のそなたを得たり」

イタリア人の様に詩を出して口説きだす。家に入っつていきなりだ
った。

「私は幸せで息が詰まりそうだ。この祝福された愛の時の後も生き
ていけるだろうか」

「まあ」

リュートを弾くのを止めて立ち上がったアリーチェの腰にそつと
手を回そうとするがそれはするりと避けられる。アリーチェの身の
こなしも若い。

「ようこそ」

「愛しい花よ」

太つちよの騎士は心にもないことを言う。あつても下心に満ちて
いる。

「私はお世辞も花の様な言葉も気取ったことも言えない」

「またそんな」

一発でわかる嘘だった。当然アリーチェにも。

「だが罪の意識がある」

「といたしますと」

これも当然嘘だ。そんな殊勝な男ではない。これも有名な話だ。

「フォード氏には申し訳ない」

「主人がですか」

「左様、貴女は騎士の妻になり私は貴女の主人になる。だから」

もうそんなつもりだ。流石にここまで図々しい男はそうはいない。

アリーチェもそれを心の中で思いその心の中で舌を出していた。

第二幕その六

「貴女は王妃としても相応しい。宝石で飾られた輝かしい胸元を私の紋章でさらに見栄えよくすることを」

「私の胸をですか」

「そう」

実際に彼女の胸を好色そうな目で見ている。

「ダイヤが煌き揺れる光の中でその愛らしい足が貴婦人の豊かな絹のドレスに包まれ虹よりも美しい光を放つでしょう」

「私は宝石も金も興味がありません」

優雅に、にこやかに笑ってみせての返事だった。

「首にスカーフを、腰に飾りを」

「それだけですか」

「後は頭に花。それで充分ですわ」

そう言つて花瓶の白い花を一輪取つて頭に差す。本当にそれだけだった。

「これだけで」

「人魚の如き美しさだ」

「お上手ですわね」

「二人きりで。何という幸せ」

「どうされますか？」

「罪を犯すでしょう。恋はチャンスを逃さずです」

実に自分に都合のいい言葉だ。

「ファルスタッフ様」

「貴女を想うことは罪なのか」

「いえ、それは」

「私がノフォーク侯爵にお仕えしていた時はスマートで爽やかに軽やかに優雅でした」

「今と同じですわね」

「それは」

笑って否定するがまんざらではない。その証拠に言葉を続ける。

「その頃私は春の四月であり五月、指輪の中を潜り抜けられる位スマートで」

「けれど貴方は」

アリーチェは白々しい文句を続けるファルスタッフに対して言うてきた。

「愛しておられるのではないのですか？」

「貴女だけです」

「メグは。どうなのですか？」

「知りません」

これまた平気で嘘をついた。

「本当ですか？」

「はい、貴方だけです」

そう言うてアリーチェを抱こうとする。

「ですから。今は」

そのまま一気にいこうとする。ところがその時だった。

「奥様！」

二階からこつそりと下りてきていたクイックリーがいきなり出て来てアリーチェに大声で叫ぶ。

「どうしたの？」

「メグさんが貴女にお話があると来ていますわ」

「メグが!？」

「はい、そうです」

「むっ、これはまずい」

もう一方の狙っている相手なのでファルスタッフは当然バツの悪い顔になる。

「ここは何とかしないと」

「もう凄い有様でこちらに来ておりますが」

「そう。それじゃあ」

「ここにいてはまずいな」

「どうぞされますか？」

「隠れましょう」

とりあえずは、であった。ファルスタッフは言うのだった。

「何処かに」

「それでしたら」

「いい場所がありますわ」

その時とばかりに、内心会心の笑みを浮かべつつアリーチェとクイックリーはファルスタッフに対して告げた。実にさりげなくを装って。

「衝立の後ろに」

「そこですな」

「ええ、そこに」

「どうぞ」

「わかりました。では」

ファルスタッフはそれに従いその衝立の後ろに身を隠す。巨体だが何とか隠れることができた。それと入れ替わりにそれまで見張りだったメグが大慌てで来たのだ。

「奥様、大変なことになりましたわ！」

「芝居でないの？」

アリーチェは側に飛び込んで来たこっそりとメグに囁く。

「そこまでする必要はないわ」

「御主人が」

「主人が？」

「戸口のところで間男を捕まえるって大声で叫んでおられるわ」

「お芝居じゃないのね」

「本当よ」

真顔で、しかも小声でアリーチェに囁く。それでももう充分だった。

「もうえらい剣幕だね」

「ああっ、アリーチェさん！」

今度はクイックリーが窓の外を見て叫ぶ。

第二幕その七

「御主人が顔を真つ赤にされて何やら叫び回りがなりたてていきり立って。まるで嵐の様ですわ」

「まさか」

「本当です。何やら大勢の殿方を引き連れて来られて。庭を囲んでもう戸口のところまで」

「間男を許すな！」

そのフォードの声が聞こえてきた。

「何があるうとも。狩りのはじまりだ！」

「猪を狩れ！」

「鼠一匹逃がすな！」

彼に従う男達の声も聞こえる。

「では屋敷の中に！」

「はい！」

乱暴に戸口が開けられる。そうして家の中にずかずかと入るのだった。カイウス達が後ろにいる。

「どうしたんですか、あなた」

「洗濯籠か」

フォードは洗濯籠を見ずに洗濯籠を見ていた。その目が険しい。

「籠には誰がいる」

「洗濯物ですわ」

「嘘を言え、この浮気女」

しかしフォードは妻の言葉を全く信じない。

「金庫を探すぞ。カイウスさん」

「はい」

彼の後ろにいたカイウスが応える。

「鍵をお渡しします。これで金庫を調べて下さい」

「わかりました」

「そしてあなた達は」

「はい」

「何でしょうか」

大勢の男達が彼に応える。

「公園に通じている出口を塞いで下さい。あの御仁は太っているが動きが速いので」

「わかりました。それでは」

「その様に」

「御願います。さてわしは」

洗濯籠を漁りだした。血走った目で洗濯物を次々と服を取り出す。しかし何もないので遂に籠をひっくり返してしまった。

「ええい、忌々しい」

「まるで台風のようなですわ」

「全く」

メグとクイックリーはそんなフォードを見て顔を顰めさせる。喜劇が邪魔されたと思っていた。しかしそれで終わりではない。フォードはさらに言うのだ。

「ベッドの下も竈の中も風呂場も井戸の中も屋根裏も酒蔵も探すぞ」

「家中をですわ」

「そう、家中だ」

バルドルフォの言葉に応えている。

「とにかく見つけ出す、いいな」

「わかりました」

ピストラが答える。その間女房達はあれこれ相談していた。喜劇が邪魔されるどころではないのがわかってきたのだ。kおうなれば彼女達も必死だ。

「あの男を何処に」

「洗濯籠の中は？」

「駄目ですわ、あそこは」

クイックリー、メグ、アリーチェがそれぞれ顔を見合わせて言い

合う。

「太り過ぎだから」

「全く面倒な」

「とにかく私は」

アリーチェは一旦その場を離れた。

「主人を何とかしないと」

「ええ、行ってらっしゃいませ」

「暫し」

その場はメグとクイックリーだけになった。ここでファルスタッフ
フが顔を出してきた。

「愛しのメグよ」

「ファルスタッフ様」

「愛する貴女に助けて欲しいのです」

「こつメグに懇願する。」

「どうか」

「どうしましょう」

「やはりここは」

クイックリーは何とかその場を逃れるべく。ある考えに至った。
それは。

「洗濯籠に」

「太過ぎませんか？」

「いや、いけた」

ファルスタッフが応える。見れば何とか籠の中に入っていた。

「何とかいけましたぞ」

「ではすぐに」

「ええ、かくして」

二人は先程フードが散りばめた服を次々とファルスタッフの上
に被せていく。その巨体が忽ちのうちに消えていく。二人も必死だ。

第二幕その八

二人が必死にファルスタッフを隠しているとそこにナンネッタとフエントンが来る。二人はファルスタッフのことは気付きもせず二人の世界の中で話していた。

「何か騒がしいけれど」

「かえって好都合よ」

ナンネッタはこうフエントンに告げる。

「だって私達に目が行かないでしょう？」

「それもそうだね」

「だからいいのよ」

にこりと笑つての言葉だった。

「好都合よ。それでね」

「何処に行くんだい？」

「二人きりになれる場所よ」

こう言いながらさっきまでファルスタッフがいた衝立のところを指差す。勿論二人は不良の老騎士のことなぞ知りもしない。実に気楽だ。

「そこでじっくりお話しましょう」

「そうだね。それじゃあ」

「二人で」

衝立の中に隠れる。それと入れ替わりにフォードがカイウス、ピストラ、バルドルフォを連れて広間に戻って来る。やはりファルスタッフを探している。

「女たらしめ、許さんぞ」

フォードは血走った目で周囲を見回しながら言つ。

「八つ裂きにしてくれる」

「フォードさん」

その彼にカイウスが声をかける。ピストラとバルドルフォは周囲

を見回している。四人は完全に一体になって血走った目になってしまっていた。

「何か？」

「家の中が滅茶苦茶ですが」

「しかしあの男がここにいるのは確かなのです」

今のフォードにとってはそんなことはもうどうでもいいのだった。

「ですから」

「構わないのですね」

「そうです」

はつきりと言い切る。

「一体何処に。タンスの中は」

今度は洋服ダンスを見る。すぐにピストラとバルドルフォがタンスに急行しそこを開けて調べる。フォードはその二人に対して問うた。

「いましたか？」

「いません」

二人はフォードに顔を向けて答えた。

「何処にも」

「そこにもいないか」

「道具箱の中にもいません」

カイウスが今度は部屋の端にあった道具箱の中を調べる。しかしそこにもいない。大きな葛籠を忌々しげにかなり乱暴な動作で閉じる。

「何処に隠れた、あの大飯食らいの飲んだくれ」

「ほら吹き of 盗人の大嘘吐きが」

フォードも忌々しげに言う。

「何処に行った。待てよ」

「どうされました？」

「そこだ」

彼は遂に衝立に気付いた。

「そこにいるのだ、あの破廉恥漢は」

「あそこにですか」

「そうだ、衝立の中」

その時メグとクイツクリーはやっとファルスタッフを籠の中に完全に隠したところだった。服を全部被せたのだ。額の汗を拭いてやれやれといった顔をしている。

「そこに違いないぞ」

「ではあそこを調べますか」

「うむ」

カイウスに対して答える。

「木っ端微塵にして犬みたいに喰らいついてやる」

「犬みたいにですか」

「鼻先を叩きのめしてやる」

もう半分自分が何を言っているのかわからなくなっている。

「神様に祈れ。精々な」

「やっと収めたけれど」

「大変なことになっていますわね」

「ええ」

クイツクリーはメグの言葉に頷いている。

「何とか隠しましたけれど」

「どうなるか」

「フォードさん！」

「抑えましたよ、至るところを」

「こちらも見つけました」

広間に戻ってきた男達に対して肩で息をしながら言うフォードだった。

第二幕その九

「あの男を。やっと」

「それは一体何処ですか？」

「お静かに」

そう言つて衝立の方を指差す。

「あそこです。あそこにあの間男と妻がいます」

「そうですか。ではあそこを」

「はい」

「苦しい」

ファルスタッフは籠の中から顔を出して呻く。

「何時までここにいるんだ」

「じつとしていて下さいな」

しかしここでクイックリーがその頭を籠の中に押し込んでしまつ。

「今は」

「うぐぐ」

「キスの音がした」

フォードは信じられない能力で衝立の中の音を聞いた。

「間違いないぞ」

「何と大胆な」

彼の言葉を聞いたカイウスが思わず呻く。実はそれを聞いたのはフォードだけだったのだ。

「ここで接吻とは」

「君達は右だ」

フォードはピストラとバルドルフォに衝立の右に回るように言つ。

「それでいいね」

「はい」

「わかりました」

二人もそれに頷いて答える。

「よし。それで私達は左手ですぞ」

「わかりました。それでは」

「ええ」

今度はカイウスに言うとかイウスも頷くのだった。

「そのように」

「御願います。他の方々はバリケードを作って下さい」

「あの騎士殿が逃げない様にすな」

「とにかく異常に素早いのです」

彼はそれをかなり警戒しているのだ。

「ですから。宜しいですね」

「わかりました、それでは」

「そのように」

「暑い。もう駄目だ」

その中でファルスタツフはまた顔を出そうとするが今度はメグにその頭を押さえられてしまった。そうしてまた中に入れられる。

「うぐぐぐぐ、何時までこんな」

「今はまだです」

「まだか」

「まだですわ」

こう言って頭を押し込む。その間にもフォードは手筈を整えているのだった。

「もう少し」

「せめて風を」

「警沢ですわ」

「それも断る。」

「今は我慢なさいませ」

「早く終わってくれ」

「何か言い合っているな」

フォードは津楯に耳を近寄せていた。

「睦言か。それも今のうちだ」

「ではフォードさん」

「はい」

今度はカイウスに対して答える。

「わかっています。では」

「旦那様は歌っているのかな」

「その割には声が高いな」

ピストラとバルドルフォも二人の話を聞いて言い合う。

「だがここにおられるのなら」

「もう終わりか、世紀の悪党も」

「さて、中には誰がいるのかしら」

「大方予想はつきますわ」

メグとクイツクリーは洗濯籠の左右にそれぞれ位置して話している。二人は随分と余裕だ。真相がわかっているからだ。

「いい加減に帰りたいのう」

その籠の中には渦中の人物がいる。彼も随分と災難だ。自業自得だが、

第二幕その十

「では皆さん」

「はい」

フォードが一同に声をかける。皆それに頷いて答える。

「合図をしますので」

「その時に」

「では」

早速その合図に入る。

「一、二の」

「一、二の」

衝立に手をかけて。それで。

「三っ！」

「出て濃い悪党！」

衝立を倒すとそこにいたのは。あのフたちだった。

「何と！」

「えっ、お父様」

「フォードさん」

ナンネッタとフェントンだった。二人は抱き合ったまま呆然としている。

「どっしてここに」

「何故衝立に」

「何っ、何故御前が」

まさかそこに娘がいるとは思わなかったので呆然としている。

「ここに。しかもフェントン君」

「は、はい」

「娘には近付かないように言った筈だが」

顔を曇めさせて彼に言う。

「全く。君は」

「しかしあの男は何処に？」

カイウスの関心はもうファルスタッフに戻っていた。腕を組んでいぶかしむ顔で言う。

「何処に雲隠れしたのだろう」

「あら、どうなったの」

「あらっ」

「奥様」

メグとクイックリーのところにアリーチェが戻って来た。召使い達を四人程連れている。

「今までどちらに」

「召使い達を集めていたのだけれど」

「そうだったのですか」

「あの破廉恥漢を懲らしめてやる為に」

得意げに笑って手を腰にやってポーズまでして言う。

「支度をしていたのよ」

「それがこの四人なのですわ」

「そういうことですね。さて」

「おや、アリーチェ」

ここでフォードは娘達から顔を話して自分の妻に気付いた。

「今まで何処に」

「細かいお話は後で。それよりも」

「それよりも？」

「本日のメインイベント。さあ」

彼女の合図で四人の召使い達がその洗濯籠を持ち上げる。そのまま窓のところに移動していく。

「いざこの籠を」

「籠を？」

「お堀の中へザブんと」

「そんなことをして何の意味があるのだ？」

「確かに」

「そんなことをしても」

ピストラにもバルドルフォにもわかりかねた。

「意味がありませんぞ」

「一体何なのか」

「それは見てのお楽しみよ」

しかしここでナンネッタが父達に言う。

「だから。見ていて」

「一体何が何なのか」

カイウスも首を捻る。

「何が起こるのか」

「さあ、投げて」

アリーチェが四人にまた言う。もう窓のところに来ている。

「いざ！」

「いざ！」

この声と共に投げられた。洗濯物を撒き散らしながら舞い落ちる。そうしてお堀にダイビングする洗濯籠を皆が見るが落ちた時には。

「あ、あれは！」

「ファルスタッフ卿！」

「これが陽気な女房達の報復！」

お堀の中でもがくファルスタッフを見てアリーチェが宣言する。

「見事それはなったのよ！」

「成程！」

「こういうことだったか！」

皆ここで合点がいった。アリーチェは浮気なぞしておらずそして言い寄った男は。あの有様だ。

「おのれ、厄日だわい！」

水浸しになったファルスタッフは意外にも泳ぎ上手だった。難なく岸まで泳いで身体を起こす。

「何たることじゃ」

「天罰だ！」

フォードの喜ぶ声が響き渡る。彼の嫉妬も見事に消えたのだった。

第三幕その一

第三幕 世の中全て冗談

『人間は皆悩み、考えるもの』

ガーター亭の入り口にかけられている看板の言葉だ。その中ではファルスタッフが一人飲んでいる。あの後ほうほうの体でここまで帰って着替えて飲んでいるのだ。当然すこぶる不愉快だ。

「親父、シエリーをもっとくれ」

親父におかわりを持って来させてさらに飲む。飲みながら言うのだった。

「厄日だ。裏切りの世の中だ。最早この世の終わりだ」

最初はこれでさらに言う。

「わしは長い間勇敢で俊敏な騎士だったがそのわしが洗濯籠に入れられ洗濯物と一緒にお堀の中に。こんな目に遭ったのははじめてだ」
「自業自得だがそんなことは気にしない。」

「酷い世の中だ。道徳の欠片もありはしない。全てが失われた。その中を行け、ジョンよ」

御前が言うのかという言葉を散々吐き続けている。

「御前の道を行くのだ」

行つてやりたい放題している。

「真の男らしさが消えていく中で。御前は突き進むのだ。本当に嫌な世の中になつた」

言いながら酒をあおる。

「神を、お助けを。私はあまりにも太り過ぎ髪には白いものを」

「お待ち」

「うむ」

祈りながらも酒が来るとそちらに専念する。それを飲むと一転して陽気になる。

「テムズ河にもこの酒を少しくれてやろうか。あいつとも長い付

き合いだ。やはり酒は永遠の友だ」

さつきまでの自分勝手な神妙さはもう消えていた。全く以って調子がいい。

「よい酒は臆病風を吹き飛ばし目を覚まさせるし心をかきたて唇から頭に昇り」

飲みながらさらに言う。

「震え声の可愛い鍛冶屋を目覚まさせてほろ酔いの血の中で蟋蟀を歌わせる。心が熱で浮かされ陽気な気分は酔いの為に跳びはね楽しい世界が平成をよそわせる。快い酒の酔いが世界を覆う」

「御機嫌よう。アリーチェさんが」

そこにクイックリーがやって来て思わず酒を吹き出した。機嫌よくやっていったというのにその気分が一発で吹き飛んでしまったのだ。つた。

「地獄に落ちろ！二度と来るな！」

「おやおやどうしてですか？」

「さつきは何だったんだ。まんまと料理され焼かれ蒸された挙句水の中だぞ！」

「それは誤解です」

「誤解なものか」

ファルスタツフが叫んでいると店の後ろにアリーチェやフォード達が店に入って来る。そして物陰から彼を見ている。

「あの方に罪はありません」

「消える！」

怒ってクイックリーに叫ぶ。

「騎士を愚弄しおって！わしでなければ成敗しておるところだ！」

「悪いのはあの下男達です」

「責任転嫁するのか」

「違います、あの方は今凄く悲しんでおられます」

「まことか？」

「はい」

クイツクリーは答える。

「ほら、その証拠にこのお手紙を」

「見せてみよ」

「どうぞ」

差し出されたその手紙を受け取って中身を見る。それを見てア
ーチェ達はヒソヒソと話をしている。

「また引つ掛かるわね」

「しめしめ」

「餌にかかった」

「あとはこのまま」

ファルスタッフは彼等に気付かない。クイツクリーもあえて視線
を彼に向けている。周到に芝居をして気付かせていないのだった。

ファルスタッフはその中で手紙を読み続ける。そうしてクイツク
リーに問うのだった。

「今日の真夜中に王立公園でか」

「左様です」

静かにファルスタッフに答える。

「そちらで」

「黒い狩衣でハーンの櫛の木の下にだな」

「愛は神秘を好むもの」

クイツクリーはここぞとばかりに雰囲気醸し出して述べる。

「アリーチェさんは貴方にお目にかかる為にあの伝説にすがられる
のです」

「伝説にか」

「そうです。あの櫛の木は魔術師や妖精の集まる場所」

欧州にはそう言われる場所が結構多い。ましてやここはドルイド
がいたかつてケルト人の場所だったイングランドだ。こうした話は
無数にある。

「あの木の枝で黒い狩人が首を吊りまして」

「初耳だぞ、それは」

ファルスタッフは随分この街にいるがそれは知らなかった。

「そんなことがあったのか」

「その亡霊が出るとも言われています」

「亡霊が？」

「そうです」

イングランドはこうい話には事欠かない。ファルスタッフも当然こうした話は非常によく聞いている。今回も興味深くそれを聞きはじめていた。

第三幕その二

「真夜中の鐘が鳴りますと不気味な気配が辺りのしじまに漂い」

「彷徨う亡霊達は群れを為して姿を現わし黒い狩人が公園に来ます」

アリーチェが言う。ファルスタッフはそのおどろおどろしさを演出した声に聞き入り完全にクイックリーが話していると思ってしまう。
っている。

「狩人はゆつくりと死人の無気力さで歩きます。その土色の顔で」

「恐ろしいお話ね」

「本当なのですか奥様、それは」

「御伽噺よ」

アリーチェはナンネッタとメグにこう断る。

「乳母が子供を寝かしつける時のね」

「ああ、それなのねお母様」

「そういうことよ」

「幹のところまで来るとそこで妖精達が出て来て男に二本の角を乗せませす」

「面白いな」

フォードは今のクイックリーの言葉に頷く。

「そんな話なのか」

「貴方もお気をつけを」

「わかつてるよ。嫉妬はもう懲り懲りだよ」

「こう妻に言葉を返す。」

「それはね」

「わかったわ。そうそうナンネッタ」

「何？お母様」

「貴女は妖精の女王様よ」

「妖精の！？」

「そうよ、白いドレスに白いヴェールに」

「ええ」

あまりよくわからないまま母の言葉に頷く。

「それでピンクのベルトをしてね」

「わかったわ」

「それで愛らしい調べを歌ってね」

「随分込んでるのね」

「貴女だけじゃないしね」

さらに言うのだった。

「メグは森の緑の妖精」

「ええ」

「クイツクリーさんは魔女よ」

今クイツクリーはいない。それでも言うのだった。

「後は子供達を集めて私と一緒に妖精や精霊や小悪魔や蝙蝠に随分と色々である。」

「それであの破廉恥漢をやっつけてあげましょう」

「皆でなのね」

「そうよ、皆で」

笑顔で娘の問いに答える。

「あの男が自分のよこしまな考えを白状するまで責めてやって。それからは」

「それからは？」

「仮装を取って夜が明けるまでパーティーよ」

そのことにも考えを巡らせての笑顔だった。

「それが終わってお家に帰るの。どうかしら」

「いいと思いますわ。それでは」

「檜の木の下で」

クイツクリーに答える。

「皆さんもそれで宜しいですね」

「はい、それで」

「わかりました」

フエントン達もそれに頷く。これで話は決まりだった。

「それでは皆様、これで」

「はい、これで」

「檜の木の下で」

皆これで別れる。だがフォードとカイウスが残っていた。二人は

「ソコソと何やら話をしていた。

「覚えましたな」

「ええ」

カイウスは真剣な顔でフォードの言葉に頷いている。

「白いドレスとヴェールに」

「ピンクのベルトですぞ」

「よく覚えました」

カイウスはそのことを頭に入れてあらためて頷く。

「そういうことで」

「はい、それで貴方は」

「私は修道僧のマントを羽織って出ますので」

「わかりました。修道僧のですな」

「ええ」

またフォードに対して頷く。

第三幕その三

「覚えて下さいましたね」

「しかと。それでは」

「成程」

しかしその話は今もファルスタッフと対しているクイックリーに聞かれていた。彼女はファルスタッフと話をしながらも二人に気をつけていたのである。

「そういうことだったのね。わかったわ」

「それでだ」

「ええ、ハーンの櫛の木の下で」

にこりと笑ってファルスタッフに答える。

「宜しく御願いますね」

「うむ」

彼は追うように頷く。彼はもう得意満面に戻っていた。しかしそこにもまたとんでもない罫があることには一向に気付いていないのであった。

その真夜中。国立公園の真ん中にそのハーンの櫛の木がある。そこに今はフェントンがいる。彼はナンネッタと共に上を見上げていた。木々の間に黄金色の美しい月が見える。その月を見ながら言うのだった。

「喜びの歌は愛しい方の唇から出て夜のしじまを縫って進み同じ様に甘い言葉を返す若い男の唇に」

甘い声で歌っていた。

「その時その音は一つではなく不思議な響きの中で喜びに振るえ夜が明け染める爽やかな大気に心惹かれつつ新たな別の声と共に戻って来る。そしてその中で僕はまた彼女に厚い口付けをするのだ」

「いい歌ね」

「ナンネッタ、そう思うかい」

「ええ。あら」

「そこにいたのね」

ここでアリーチェがやって来た。もう妖精の格好をしている。

「フェントン、貴方の服を見つけてきたわ」

「僕のですか」

「そうよ、これよ」

言いながら一着の服を出してきた。

「これを着て」

「これは」

「修道僧のマントよ」

にこりと笑って彼に告げる。

「うちの人がまた何か企んでいるからね。それでなのよ」

「これを着るんですか」

「ええ、それでいいわね」

そのマントを手渡したうえでまたフェントンに問う。

「これで出し抜くのよ。先んずれば人を制すよ」

「成程」

「奥様」

今度はクイックリーが来た。もう黒い魔女になって箒さえ持っている。

「来ましたわ」

「あら、もうですの」

アリーチェはクイックリーのその言葉を聞いて声をあげた。

「早いですわね」

「さあ、隠れて。フェントンも」

「はい」

「隠れて着替えてね」

「わかりました」

彼等が身を隠すとそれと入れ替わりの形でファルスタッフがやって来た。何やら言っている。

「ここだな。その櫛の木は」

まずは櫛の木を見た。

「さて、後は」

「ファルスタッフ様」

ここでアリーチエがそつと声をあげる。

「おお、我が愛しの」

暗闇の中なので彼女の格好まではわからなかった。

「ようこそ来られました」

「貴方をお待ちしていました」

まずは殊勝に演技をしてみせる。

「私は貴女の忠実な僕、ジユピターです」

「ジユピター!?!」

「そう、雄牛です」

つまりアリーチエこそがエウロペだと言いたいのだ、

「その愛を求めて餓えている雄牛でございます」

「またその様なお戯れを」

「いえ、まことです」

ここでも懲りずに心にもないことを言う。

「ではここで愛を」

「いけませんわ。メグも来ています」

「彼女も」

「私達のことを疑って」

「それはまずいな」

それを聞いてポツリと呟く。

第三幕その四

「どうしたものか」

「何か？」

「いえ、何も」

（しかしだ）

誤魔化しながら心の中で呟く。

（上手くやれば両得だな。わしの腕の見せ所か）

「さて」

ここまで考えたうえであらためてアリーチェに顔を向けてきた。

「奥様」

「はい」

向かい合ったところで。後ろからそのメグの声がした。

「悪魔よ！」

「悪魔！？」

ファルスタッフが悪魔と聞いて顔を顰めさせると丁度彼女が逃げる場面が見える。慌てて森の向こうへ走り去っていく。そして彼女も。

「悪魔！？大変だわ」

「奥様、どちらへ」

アリーチェも逃げ去った。気付いた時にはファルスタッフは一人になっていた。彼は一人になると呆然としてまた呟くのだった。

「まさか悪魔がわしを地獄に落としたりはしないだろうな」

「森の精、小さな妖精」

ここでナンネツタが物陰から言う。

「空気の精、木の精、水の精」

「な、何だ！？」

ファルスタッフは突然少女の声が聞こえてきてギョツとした顔で辺りを見回す。

「今度は何だ!？」

「夜も深くなりました。さあ出るのです、静かな闇の中に」

「妖精か、これはいけない」

ファルスタッフは妖精とわかりすばやく身を伏せた。そうして顔を隠したのだった。

「あれを見たら命がないぞ」

この時はこう思われていたのだ。案外迷信深い彼はそれを信じたのである。

彼が身を伏せ顔を隠すと。そこにアリーチエが子供達を数人連れてやって来た。皆それぞれ妖精に扮して実に可愛らしいものである。

「あれよ」

「あの男よ」

反対側からナンネッタも出て来た。彼女も子供達を連れている。

彼等は隠れているつもりの方ルスタッフの側に来た。そうして口々に言い出す。

「私の言う通りにね」

「わかったよ」

「わかりました」

子供達は二人の言葉に頷く。そのうえで踊り出す。ファルスタッフの周りで

「季節風のそよぎの上を走りなさい。有明の月の光が木々の間を選らず中を軽やかに」

「軽やかに」

子供達は踊りながらナンネッタの言葉を繰り返す。

「魔法が歌と踊りを結び付けてくれます」

「森は眠り香りと闇とが息づいている」

子供達も言う。

「そして闇の中には水底の緑の隠れ家の様に光が輝いている」

「月明かりの中を花から花へと彷徨うのが私達」

ナンネッタはまた言う。

「花はその心の中に幸せを隠しているわ」

「心の中に幸せを」

「百合やスミレの花で内緒の言葉を書きましよう。花は妖精たちの暗号」

「妖精達の暗号」

様々な格好の子供達があちこちから出て舞う。バルドルフォは怪しい赤いケープと頭巾の魔法使いでピストラはパンに扮している。カイウスは仮面をした修道僧、フェントンは仮面をしたそれだ。フォードは緑の妖精の王様だ。女房達は打ち合わせ通りの格好でそれぞれ出て来たのだった。

「むっ、待って下さい皆さん」

「どうされました？」

バルドルフォがわざとファルスタッフにつまづいて一同に声をかける。皆演技で彼に顔を向ける。

「何かいますぞ」

「一体何が」

「随分大きいですわね」

クイツクリーがファルスタッフの巨体を箒の柄の先でこづきながら言う。

「男ですわ」

「人間の!？」

「はい、けれど」

「角があるぞ」

フォードが言う。

「林檎みたいに丸く」

「船みたいに大きい」

ピストラとバルドルフォの言葉だ。

第三幕その五

「何だこいつは」

「起こそう」

二人はさらに言う。

「おい、起きろ」

「御前は何者だ？」

足で小突くが反応はしない。姿を見ないように必死なのだ。

「起こすか？」

「重いですよ」

フードとカイウスが言い合う。

「あまりにも重い」

「何なんだ、これは」

二人が持ち上げようとしているその間に。アリーチェはそつとフエントンとナンネットタに近寄る。そのうえで二人に対して囁くのだつた、

「隠れなさい、うちの人達に見つかったらことよ」

「そうね。それじゃあ」

「私が呼ぶから」

ナンネットタが頷くとクイックリーも二人に言った。きた。

「その時に出て」

「わかったわ」

「じゃあその時に」

「ええ」

二人はそれに頷く。そうしてその場から消える。今度はバルドルフードとフードが子供達を集めてけしかけるのだった。

「そら、そのフォークやいらくさで突き刺してやれ」

「容赦はいらないぞ」

「えい、この太っちょめ！」

「早く起きろ！」

子供達もふざけながらその手に持つている悪魔のフォークやいらくさでファルスタッフを突つつく。だがそれでも彼は頑張っている。起きるものか、決して

「刺して突つついて」

アリーチエとメグとクイックリーが笑って子供達をはやす。

「噛み付いて引っ張って」

「悲鳴をあげさせるのよ」

「わかつたよ」

「じゃあ」

「あいたっ！」

子供達は本当にそうする。噛まれてつねられたファルスタッフが思わず声をあげる。

「止めてくれ、勘弁してくれ！」

「打ち鳴らせ打ち鳴らせ」

子供達は打楽器を鳴らす。カスタネットや拍子木やガラガラを。

「この老いぼれの酒樽を起こしてやれ」

「大きな腹の上で踊りを踊ろっ」

「ファランドールを踊ってやろっ」

「それでつつっけつつっけ」

「引っ張れ引っ張れ」

「痛い、痛い！」

叫びながらもまだ顔を上げない。そんな彼に皆でよってたかつて言う。

「ならず者！」

「ろくでなし！」

「食いしん坊！」

「大酒飲み！」

「太っちょ！」

「悪党！」

全て真実だから恐ろしい。

「跪け！」

「醜い太鼓腹！」

皆ファルスタッフを囲んでさらに言う。それでも彼はうつ伏せになつたままだが。

「人騒がせな破廉恥漢！」

「女たらし！」

「三重顎！」

そして彼等はさらに言った。

「反省していると見え！」

「今までの悪事を！」

「わかつた、わかつた！」

いい加減に噛まれてつねられて突っつかれて言われてで困り果てていたので思わず言う。

「わかつたから勘弁してくれ！」

「悔い改めよ！」

「悪事をするな！」

「わかつたからもう！」

「では答える！」

「答える、答える！」

ひっくり返されて転がさせられてそれでも目を閉じる。その中の言葉だった。

「だからもう」

「よし！」

しかし今のバルドルフォの声を聞いて。ファルスタッフはふと気付いたのだった。

「今の声は」

「むっ、しまった」

「しまったではないわ！」

丁度ひっくり返されていたのでいい具合に起き上がる。言うまで

もなく目を開けている。そのうえで叫んでいた男の一人を見れば。
それがバルドルフォであった。

第三幕その六

「この赤鼻が！地獄の炎がいいかタールがいいか硫黄がいいか！」
「どれも御勘弁を」

「この馬鹿者！あつかましい役立たずが！」

完全に起き上がってバルドルフォの首根っこを掴んで喚きだす。

「古ぼけた矛槍に毒蜥蜴に無頼漢の盗人！わしの言ったことに嘘偽りがあるか！」

「どうかお許しを」

「………全く」

自分のことは見事に棚に上げてカリカリとしている。

「何かと思えば。全く」

「まあまあ」

「これも余興」

「余興でこんな目に遭うのか」

ファルスタッフは皆をねめつけながら抗議した。

「何がどうして。わしが何をしたのじゃ」

「思いきりしていますわ」

「全く」

「むむ、しまった」

アリーチエとメグが二人並んでいるのを見て真相を悟った。

「ばれたか」

「女を馬鹿にすると怖い」

「そういうことですわよ」

「そういうことか。成程な」

「全ては陽気な女房達の復讐」

「御覧遊ばせ」

二人は笑顔でファルスタッフに話す。ここでフォードが彼に尋ねてきた。

「それですな」

「うむ」

「貴方の頭に角を乗せられたのはどなたですか？」

「それは」

「はい。私です」

「むむっ」

ファルスタッフはクイックリーの姿を見て眉を顰めさせた。フォードもわかって質問したのだ。中々意地が悪い。

「そういうことだったのです」

「わしは完全に騙されたのだな」

「そうです。普段は騙す立場の方がしてやられたと自分で言う。」

「そういうことだな」

「左様、皆陽気な復讐でのこの」

「夏の夜のささやかな復讐」

「真夏の夜の夢だな」

ファルスタッフは少しおどけてこう言ってみせた。

「ということだ」

「まあそうですな」

「有り触れた奴はどいつもこいつもわしを笑いものにしてそれを誇りにしよる」

ファルスタッフはここまで聞いたところでわざと勿体つけて言うてみせた。

「しかしわし以外の誰もそれに相応しいほんのひとかけらの機知さえ持ってはいない」

「そうだったのですか」

「そうじゃ」

かなり強引にそういうことになってしまった。

「そんなあんた達を鍛えるのがわしじゃ」

「貴方ですか」

「わしの機知は皆を賢くするのじゃ」

随分と大袈裟なことを言う。それが一段落ついたところでフォードが出て来た。アリーチェ達はそれを見て遂に出たか、と心の中で思った。

「さて、皆様」

「どうされましたか？」

「一つよい知らせがあります」

「お知らせですか」

「はい、この愉快的仮面劇をフィナーレで飾りたいと思います」
にこやかに笑つての言葉だった。

「妖精の女王の結婚式で」

そつとバルドルフォが出て来た。そこにはカイウスともう一人いた。よく見ればそれは妖精の服を着たバルドルフォである。クイツクリーがこつそりと着替えさせていたのだ。

「さて、ここに」

「おお、確かに」

「女王と修道僧が」

「また面白い組み合わせですな」

皆それを見て笑顔になる。フォードは仲人の場所で話す。

「ここに純白の衣装を着てヴェールと薔薇の冠を被った女王が花婿と共にいます。皆様祝福を」

「待つて、あなた」

ここでアリーチェが出て来た。

第三幕その七

「どうした？」

「もう一組いいかしら」

見れば彼女の後ろにそのもう一組がいる。青いヴェールを全身に被った乙女らしきものとまた修道僧である。これまた奇妙なカップルだった。

「この二人も」

「ああ、いいぞ」

にこやかに笑って妻の言葉に答える。

「喜びが倍になる。いいことだ」

「宜しいですね」

「男に二言はない」

取り返しのつかない言葉だった。

「さあ、それでは神がそなた達を結び付けて下さる」

「今こそ仮面を」

「どっぞ」

皆口々に二組のカップルに言う。

「ヴェールを外して」

「さあ」

実際にヴェールと仮面を外すと。何と一方はカイウスとバルドルフォ、そしてもう一方はナンネッタとフェントンであった。それを見たフォードとカイウスの驚くこと。

「な、何っ!？」

「これは一体!」

「暫し待たれよ一方は」

「男同士は流石に」

「できませんよ」

皆腹を抱えて言う。その中でフォードもカイウスも呆然としてい

る。

「どういうことなんだ」

「何故こんなことに」

「しかも」

フォードはここでもう一組のカップルを見る。それは。

「娘とフェントン君が」

「見事に決まったわね」

「そうね」

女房達がはしゃいでいる。状況証拠以上のものだった。

「そういうことだったのか」

「あなた」

その主犯が満面の笑みで夫に声をかけてきたしてやったりといった顔だった。

「人は自分の罫にかかることもありませんよ」

「それが今の私か」

「そういうことよ」

「うづむ」

「さて、フォードさん」

してやられたフォードが唸る顔をしているとファルスタッフがこやかに笑って出て来た。そのうえで彼に語ってきた。

「今回やられたのは誰ですか」

「私だと仰りたいのですな」

「左様」

その笑みで彼に告げる。

「貴方です。そして」

「そして？」

「貴方も」

ファルスタッフはカイウスも指差して言った。

「見事にしてやられましたな」

「貴方もですが」

「わしは平気なので」

流石はファルスタッフだった。

「もう気にはしておりません。何故なら」

「何故なら？」

「御覧なされ」

今度はフェントンとナンネッタを指差している。二人は仲良く抱き合いにこにことしている。それを見て彼もまたにこにことしているのだった。

「己がしてやられても他人の幸福を見られればそれで心が安らぐ性質でしてな」

「左様ですか」

「そうですぞ」

「そうだな」

フォードもそれに納得した。

「人間は生きていると多少のごたごたは避けられないがそれに甘んじるものだ」

「何ごとも受け入れなければなりませんぞ」

またファルスタッフが言う。

「それが人生」

「そうですな。それに」

フォードは娘とその恋人を見る。そのうえでまた述べた。

「娘は幸せになれたし私も新しい家族を手に入れることになる。これは幸福だな」

「他人の幸福は自分の幸福」

ファルスタッフはまた言う。

第三幕その八

「そうですぞ」

「確かに。そうですな」

「いや、流石は旦那様」

「そう仰るとは」

今まで裏切っていた従者達も彼をヨイショしだした。実に調子がいい。

「やはり我々には旦那様こそが」

「理想の主」

「わかつたら明日は派手に騒ぐぞ」

「はい」

「わかりました」

「いやいや」

しかしここで気を取り直したカイウスが出て来た。

「今からでどうでしょうか」

「今からとな」

「あら、いいですね」

それを聞いたメグが乗って来た。

「皆さん集まっていますし」

「子供達も」

メグも言う。

「丁度好都合ですよ」

「ふむ。それではだ」

「ええ」

「ここは皆ですね」

ナンネットとフェントンも言う。

「楽しく皆で」

「宴を」

「ではでは皆さん」

アリーチェが真ん中に出てその皆に告げる。

「ファルスタッフさんと楽しく」

「賛成！」

「是非共！」

フォード達だけでなく今宵の騒ぎに参加した全ての者がそれに賛成する。それを見てファルスタッフは誇らしげに鷹揚に頷いている。そうして一節言うのだった。

「ではその楽しい宴の前にお一つ」

「歌ですか」

「左様。世の中全て冗談」

まず歌いだした。

「人は誰もが生まれつき道化師で頭の中では理屈をごねている」

「頭の中では理屈をごねている」

皆それについて歌う。

「誰も彼もが道化師でお互い笑い合う。しかし」

「しかし？」

「最後に笑う者こそ本当に笑っているものさ」

「確かに」

「そしてその最後に笑っているのは？」

「このわしだ!!!」

最後の最後までファルスタッフはファルスタッフだった。しかし皆その彼を囲んで笑顔で大声で笑うのだった。陽気な女房達の喜劇はこれで終わったのだった。主役の最後の言葉で。

ファルスタッフ 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3536i/>

ファルスタッフ

2011年4月28日00時55分発行